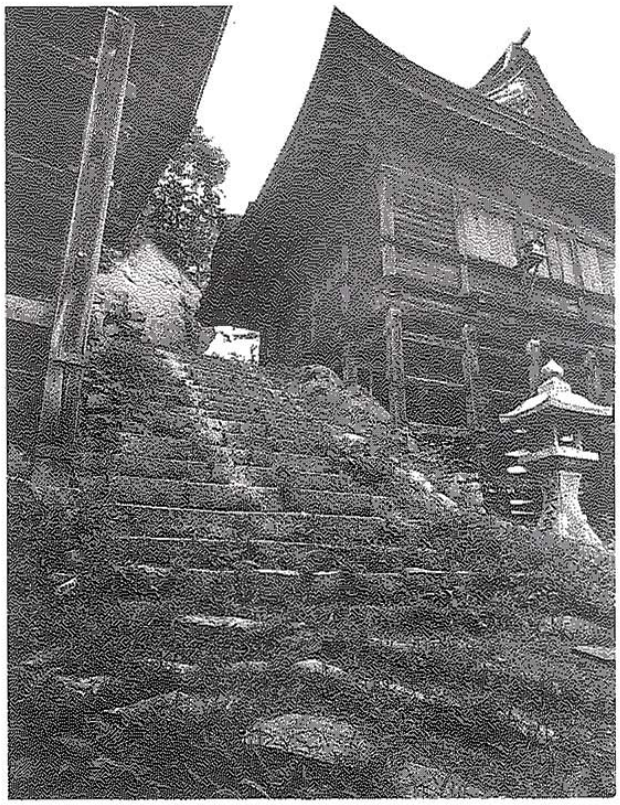
日吉大社

①

日吉大社（大津市坂本本町所在）の神体山である八王子山（小比叡峯・398m）は、遠望すると美しく整った印象的な姿の山で、山麓の一帯には横穴式の後期古墳が群在しています。山頂の近くには祭祀（祭り）遺跡と思われる磐境（金大巌）があり、これを取りまいて二つの奥宮社殿（牛尾宮と三宮）が建っています。昔は全山が、一定の祭りの期間以外は人々の入山を禁じられた神の山になっていたものと思われます。

牛尾宮の祭神は、のちにふもとに祀られて東本宮となり、三宮の祭神も、ふもとに祀られて樹下宮となり、上宮の2社と下宮の2社とを併せて4社を東本宮グループと総称しています。ふつう農耕に関する祭りでは、男女の2柱の神をまつることを基本とする形が多いので、日吉の場合でも、はじめは「日枝比古」「日枝比咩」といったような名で呼ばれていたのかも知れません。



八王子山頂の奥宮社殿（前野隆資氏撮）

こうした東本宮系の神々の鎮座は、神社の古い祭りである「午の神事」（4月12日）によって、いまも毎年再現されつづけています。この神事は、中世以降は神輿（みこし）神事によって行われていますが、これは「御生神事」と呼ばれ、山宮から里宮への勧請（神を移しまつること）を象る神事として行われているのです。日吉社の東本宮グループ鎮座の歴史は、神道宗教学のうえからも合理的に解釈でき、極めて典型的な要素を備えているものであるということができます。

山宮祭祀の場合は、山が宗教の場、つまり神々の居所であって、ここに入り込んで神と人との仲立ちをした司祭者の、上代社会での意義と地位は大きいものであったにちがいありません。古代の司祭者は、半年は山宮（神体山）に籠もり、やがて神の代弁者（神がかり）となり、みずからが神格を帯びて山を降り、こんどは里宮の司祭者として奉仕するといった性格をもっていたようです。

②

いま日吉大社の中心的な存在となっている西本宮の鎮座は、東本宮の場合とはその趣が異なっています。東本宮の場合は、上述のように、地縁と血縁とにつながる本質的な宗教事情によるものですが、西本宮は、宗教的には第二義的な、他所からの勧請神なのです。

日吉社記などによりますと、天智天皇七年

財団法人　滋賀県文化財保護協会

東本宮本殿（国　宝）

（668）、大津京におられた天智天皇の発意によって、大和国・三輪山の神（大己貴神）を日枝の山麓の地に勧請したものであると伝えています。三輪明神は、大三輪山を信仰の対象とする原始信仰の形をいまも持続していることでは、最も規模の大きい神社ですから、この神を迎えて大津京の地主神、守護神としたことは、充分にその理由が考えられます。この勧請と鎮座の形を象っているのが「申の神事」（４月14日）です。

また、平安時代のはじめになって、八幡神を迎えて摂社の宇佐宮とし、また、山岳信仰に深い関係をもち、比叡山とは関連の深い白山比咩神を勧請して、摂社の白山宮としましたが、これによって西本宮グループの３社が成立することになります。この３社と上に述べた東本宮系の４社とを併せて「山王七社」ができあがったのです。

つづいて主要な社殿に竈殿社がまつられたのも日吉社の特色でありますし、唐崎社、気比社、早尾社などの主要な末社も、日吉社の信仰組織の中に組みこまれて来ます。また、延暦寺の相応和尚によって東・西両本宮の社殿が改築されましたが、いわゆる山王造（日吉造）の起源は、すでにこの頃に発生していたともいわれています。日吉社の神輿も、延暦十年(791)に桓武天皇の勅願によって大宮と二宮の２基が新造されて、はじめて唐崎へ神幸が行われ、またつづいて貞観七年（865）の春には、聖真子、八王子、客人などの神輿も造られたということです。

嘉祥三年（850）の冬、五畿七道（つまり全国）の主だった神々に対して神階が授けられたときに、西本宮は従二位に、東本宮は従五位の階級になったことが三代實録に書かれています。また、延喜式の制度ができたときには、その神名帳に社名が載せられ、諸国の3,634座の一つとして、一ばん格式の高い名神大社に名をつらねたことは、はっきりした史実でありますし、長暦三年（1039）には「二十二社」に加わり、天下の主要な大社としての地位が確定しました。これらのことは、東本宮が鎮座してからおよそ700年余、西本宮を坂本に迎えてからおよそ 400年に近い年数が経っていました。

③

平安時代の俗謡を集めた梁塵秘抄という書物には、「仏法弘むとて天台麓に跡を垂れおわします。光を和らげて塵となし、東の宮と

ぞ斎れおわします」と詠っていますが、これは日吉社の東本宮のことです。伝教大師以来、日吉社は、比叡山の地主神、天台宗の護法神あるいは伽藍神として融合し、仏教とも深い関係を取り結んで発展し、やがて日吉山王などと称せられるようになります。また、祀官（神職）のほかに社僧などを置き、社頭で行われる法華経の「論議」や「法楽」などの仏教的な行事は、いまもその一部の伝統が守り伝えられています。

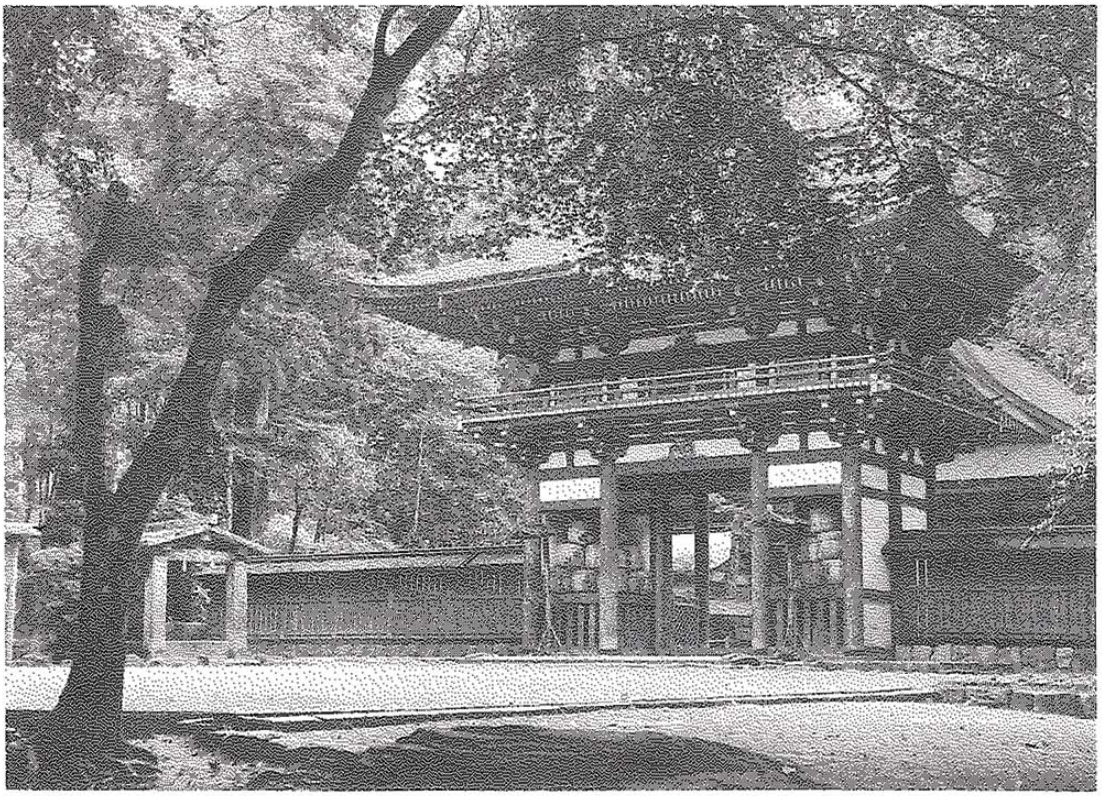
中世以前の古図によると、広い社域には、根本多宝塔や日吉社新御塔、日吉念仏堂をはじめ、山王七社のそれぞれに付設された彼岸所といわれる仏教的な建物などが多くみえます。こうした社域内外の状況は、元亀元年（1570）の兵乱によって焼失したのちも、ある程度は復興し、明治初年の神仏分離の時期にまで及んでいます。しかし、神仏分離の際には、数日間にわたって、仏教的な器物や宝物が社頭で焼却されたと伝えていますが、一つの宗教改革であるとは言え、文化財保存の立場からみると誠におしいことをしたものです。

日吉社の組織は、山王七社（上七社）のほかに、別表のように中七社と下七社があり、これらを併せて「山王二十一社」と呼んでいます。また、社域内には更に多くの末社があり、そのすべてを併せて「社内の百八社」とも呼んでいます。そのほか社域外にも、坂本、下阪本、比叡山上などにわたって「社外の百八社」といわれる末社が散在していて、最隆盛期には内外併せて 216社におよぶ摂・末社群からなりたっていました。

天台宗が弘まるにつれて、また日吉社の社領が増加するのに応じて、山王社の分霊社はひろく分布して、いまでも全国に 3,800社に近い日吉神社があり、中世から近世にかけて、日本人の精神文化に及ぼして来た有形無形の影響は大きいものがありました。そうした庶民教化の上に働いたのが「山王一実神道」といわれる「天台神道」です。これは、延暦寺が、中世以降の神仏習合の史実に基づき、天台の教理によって体系を立てたもので、天海僧正によって力強く押しすすめられました。

（景山春樹氏提供）

㊟ 日吉神社は、上に述べた「日枝」の文字にもとづいて「ひえ」と呼ばれて来ましたが、「日吉」の文字を用いるようになってからは「ひえ」とも「ひよし」とも呼ばれています。



西本宮楼門（重要文化財）

天台座主の奉幣（前野隆資氏撮）

山王祭り（前野隆資氏撮）

（別表）

山王二十一社と本地仏等一覧

		現社名	祭神名	旧称	本地仏	備考
上七社	本宮	西本宮	大己貴神	大宮（大比叡）	釈迦	本殿は国宝 拝殿は重要文化財
	〃	東本宮	大山咋神	二宮（小比叡）	薬師	
	摂社	牛尾神社	大山咋神荒魂	八王子	千手	本殿・拝殿ともに重要文化財
	〃	宇佐宮	田心姫命	聖真子	阿弥陀	
	〃	白山姫神社	白山姫神	客人	十一面	
	〃	樹下神社	鴨玉依姫神	十禅師	地蔵	
	〃	三宮神社	鴨玉依姫神荒魂	三宮	普賢又は大日	
中七社	摂社	大物忌神社	大年神	大行事	毘沙門	本地仏については異説が多い
	末社	牛御子社	山末之大主神荒魂	牛御子	大威徳	
	摂社	新物忌神社	天知迦流水姫神	新行事	持国天または吉祥天	
	末社	八柱社	五男三女神	下八王子	虚空蔵	
	摂社	早尾神社	素盞嗚神	早尾	不動	
	〃	産屋神社	鴨別雷神	王子	文殊	
	末社	宇佐若宮	下照姫宮	聖女	如意輪	
下七社	末社	樹下若宮	玉依彦神	小禅師	竜樹	本地仏については異説が多い
	〃	竈殿社	奥津彦神 奥津姫神	大宮竈殿	大日	
	〃	同上	同上	二宮竈殿	日光・月光	
	摂社	氏神神社	鴨建角身命 琴御館宇志麿	山末	摩利支天	
	末社	巌滝社	市杵島姫命 湍津島姫命	岩滝	弁財天	
	〃	剣宮社	瓊々杵命	剣宮	不動	
	〃	気比社	仲哀天皇	気比	聖観音	

上記以外の指定文化財

重要文化財　西本宮楼門・東本宮楼門・末社東照宮（本殿・石の間・拝殿・唐門・透塀）・日吉三橋（大宮橋・走井橋・二宮橋）・神輿7基

県指定文化財　山王鳥居（木造合掌鳥居）

国指定史跡　日吉神社境内